

アイデンティティの土台・基盤

園長 児嶋 草次郎

3月5日の啓蟄（けいちつ）を迎え、大自然は一斉に動き始めています。と書けば、常識的な表現になりますが、今年は暖冬ということで、すでにもう虫も小動物も植物も活動を始めています。友愛社の園庭では、河津桜はすでに葉桜となり、花モモのピンクの花が満開、山桜ももう咲き始めています。雨もこのところ多く、蛙も鳴き始めています。ナタネ梅雨が前倒しになったようで、季節が2、3週間早く巡って来ているようです。地球温暖化とは言え、これから来る厳しい夏の暑さは、身に伝えます。今年は少し手加減してほしいと願っています。

そう言えば、NHK テレビBS1で「“土” 生命の星の小宇宙」を録画して見ました。思わず畳の上で正座してしまうくらい驚きの映像でした。学んだことを2点あげておきます。

- ・1gほどの土の中に、50億から200億ほどの微生物（菌類、地衣類、細菌、原生動物等）が生息し、互いに共生しあっているというのです。地球上の人類が80億人とすると、わずか1gの土の中も一つの小宇宙です。野菜や花を育てる時、そのことは、常にイメージしなければならないと反省しました。それらの微生物たちのわずかな力関係の中で、苗がうまく育ったり育たなかったりするのです。

- ・土の中には、草や木の腐ったものなどの有機物が含まれ、これが育つ草木の栄養分となるわけです。地球温暖化の原因となっている二酸化炭素を固定化するものが草や木であるとするならばそれらを地中に埋めることは、二酸化炭素を地中に封じ込めることになっているのだそうです。だとするならば、不要な草木を焼却するのではなく、粉碎してできるだけ地中に埋めてあげる方が、空中の二酸化炭素を減らすことに貢献できるのだと認識できました。刈った雑草や剪定した枝葉は、これからはできるだけ粉碎して堆肥にしようと、改めて思いなおしました。

さて、今回は、2月10日（土）から11日（日）にかけて行った「道休・独立自尊旅行」について書かせていただきます。毎年行っている友愛園中・高生たちとの研修旅行です。今まで何度もこの友愛通信で書かせていただきましたが、子供たちは1年1年成長し、少しずつ入れ代わっていきますので、職員はそのつど心を初心に帰らせて取り組まなければなりません。

今年は大分県日田市にある広瀬淡窓の作った私塾「咸宜園」跡での体験と、中津市にある福沢諭吉記念館の見学、そして、宇佐神宮へのお参りの三つがメニューでした。さらに、日田市内の旅館では、夕食後、卒園生の西山君の講話も聞くことができ、より充実した研修となりました。西山君は九州保健福祉大学で社会福祉士という国家資格を取得し、現在、日田市内の児童家庭支援センターで働いています。旅行から帰って書いた子供たちの研修旅行の感想文を読むと、西山君の話がかなり心に響いたようです。

高校生たちの「自覚旅行」も含めて、これらの旅行は、石井十次の「旅行教育」の現代版として始めたものですが、いつも思い出すのは、石井十次が高鍋島田小学校を卒業した時の九州旅行です。おそらく父親の指図によるものですが、義兄の岩村真鉄をつけて熊本、長崎、鹿児島にやっています。熊本では、田原坂の戦いの跡地を訪れています。父親のねらいは何か。父親自身がこの戦争に参戦し、戦争の冷酷さ・無情さについては実感しているのですが、まだ戦争が終って1年ほどの人骨も散らばっている

ような荒廃した地を見せることで、非戦の感性を養おうとしたのではないか。最近はそのようにとらえています。その頃の十次少年は、西郷隆盛を崇拜し軍人になる夢を抱いていたのです。その田原坂での体験が、軍人養成の学校（攻玉社）を退学する伏線になっていくのだと思います。特に感性に関しては知識だけではなく体験でしか学べないのだと思います。そういう考えは石井十次自身にも身について、岡山孤児院教育の中でも、旅行教育という形で具現化していったのでしょうか。現在の友愛園の旅行教育も同じです。その目的を簡単に三つにまとめると以下のようなになるでしょう。キーワードは、体験、感性、自立です。

- ① 先人たちの精神の支柱となって来た名所や旧跡を訪ね、その精神・文化を体験的に学ぶ。
- ② 先人たちの精神や魂に体験的に触れることで、流れている誇りやプライドを感性的に体得する。
- ③ 様々な文化施設や人と交流することで、社会性を養い、自立への希望を持たせる。

話を今回の旅行にもどします。2月10日朝6時45分頃に、小規模児童養護施設「じゅうじの家」も含めて23名の中・高生（1人は小学生）と13名の職員が園舎の前に集まり、7時3分に貸切バスで出発。明け方の天気はまあまあ良好になりそうで、満開の日本スイセンと梅の花の良い香りが、清涼な朝の空気の中に漂っていました。高速道路をひたすら北上し、別府湾サービスエリアで休憩して、そこから内陸部へ入り、日田市には11時前には着きました。市内のレストランで昼食を取って、12時頃には「咸宜園」に到着。私は、到着する5分前にバスの中で次のように話をしました。子供たちの集中力と緊張感を高めるためです。うわの空で見て回ると見えるべきものが見えず、感じるべき空気も感じ取れないままにチャンスを逃してしまいます。次の広瀬淡窓の詩をまず読みます。

「道（い）うことを休（や）めよ 他郷苦辛多しと
同胞（どうほう）友あり 自らあり親しむ
柴扉（さいひ）暁（あかつき）に出ずれば霜雪のごとし
君は川流を汲め我は薪（たきぎ）を拾わん」

そして次のように紹介しました。

「今から200年以上前に広瀬淡窓の作った私塾だけど、この詩を読むと友愛園が一番近いと思います。『君は川流を汲め我は薪を拾わん』というところが一番重要です。今の友愛園のように、ボタンを押せば御飯ができるわけではない。朝御飯を作るのに、川に行つて水を汲んで来て米を洗い味噌汁も作らなければならぬ。『君は川に行つて水を汲んで来い』と淡窓先生が言っている。その次の『我』というのは淡窓先生自身。『私はそのあたりに行つて御飯を炊く薪を拾って来よう』と言っておられる。つまり、寝食を共にする師弟同行の生活をしながら学問を学んでいる。

友愛園の職員たちも同じ屋根の下で一緒に生活しながらみんなの指導をしている。こういう所は日本全国見渡しても、ほんとうに少なくなった。今もこの咸宜園には、古い建物が残っているので、そこに座った時、当時の生活をイメージしてみたい。そこで論語の素読もさせてもらうので、大きな声で朗読して、当時を実体験する。」

咸宜園の古い建物（秋風庵）では、ガイドの江口氏が20分ほど説明してくださいました。もと小学校の先生だったとか。その解説の中で一番ありがたかったのは、最後にアメリカ大リーグの大谷選手に話をつなげてくださったことです。私が「明倫塾」の中で子供たちに紹介した「目標達成シート」を江口氏も紹介し、勉強だけではなく、生活基盤の重要性を強調し話を結んでくださったのです。子供たちの目色も変わったし、まるで打ち合わせでもしていたかのような、こちらの希望通りの展開となりました。

説明は、男児グループと女児グループ二つに分かれて聞いたのですが、それぞれのグループごとに、最後に畳の上に正座して、みんなで論語の素読を大きな声で行いました。男児グループはトモナがリー

ドし、女兒グループはネネがリードしました。友愛園では毎月、明倫塾でやっていることですが、こうして外部でやると新鮮で、遠い200年前の若者たちの朗誦に自分たちを重ねることができました。生へのエネルギーが魂の奥底から湧き出し、体中の細胞が歓喜し、活力となってみなぎっていくのを感じ取ることができます。側で見ておられた江口氏も感動されたようです。帰園して書いた子供たちの感想文の中にその時の体験を次のように記していた子がいました。

「咸宜園の説明をしてくださった方が、とても感動しているのを見て、僕たちが普段していることで誰かを感動させることができ、とても胸があったかく誇らしい気持ちになりました。僕たちが普段していることは、とてもすごいことなんだなと実感しました。この咸宜園での素読は、これからの人生で一生忘れることはないだろうと思いました。(りゅうと)」

その後、私たちは、江戸幕府直轄の天領地でまだ江戸・明治時代の建物の多くが残る豆田町を散策し、夕方4時頃には若ノ屋旅館に入りました。

夕食後の卒園生西山君の講話も、子供たちにとっては忘れられない思い出になりそうです。咸宜園の江口氏は、大谷選手の「目標達成シート」を引き合いに出しながら「生活基盤の重要性」を話されましたが、西山君は、ある野球解説者の話として、「土台」の重要性を指摘しました。こんな話です。積み木を1個1個積みあげても、3分くらいで倒れてしまう。土台となるようにしっかり複数の積み木を組み合わせながら積んでいくと倒れない。

彼は16年間の友愛園での生活を振り返りながら、次のような主旨の話をしました。

『自由がないとか、労作とか、掃除とか、みんなそれぞれに不満あると思う。しかし大事なことは、それらの不満にどれだけ勝てるか。何のために自分はここで生活しているのか。自分の生活を振り返りそれを受入れられるようにならなければならない。親との関係についても、良い距離感を調整できるようになること。社会に出るまでに考えてほしい。そして、社会に出た時に、振りかえられるようになってほしい。園で生活してよかったと思える日が来る。今の生活を大事にしてほしい。』

子供たちの受け取りはそれぞれに違うのかもしれませんが、ここに3人のその後の感想文を紹介します。

「西山さんの話を聞いて、土台作りが大切だということを学びました。西山さんも園生活をしている時は、いろいろと思うことがあったと話していたので、少し安心しました(なな)」

「私たちにも分かりやすく土台作りの話を、積み木で例えて話してくださいました。実際に友愛園で生活していた立場からの意見ということもあって、自分の心に刺さることが多かったです(なつこ)。」

「友愛園の生活でルールを守ること、掃除、作業、礼儀、挨拶など様々なことを習慣として行っていくこと。他にも多くありますが、これらは卒園後に、多くの誘惑や葛藤に負けないための土台作りの材料だと、西山君から聞きました。土台がゆるいとすぐ流されてしまい、目標を見失ってしまいます。小さなことをこつこつと頑張っていくことが、将来の自分を助けることになるので、小さな努力を大切に生活していきたいです(ねね)。」

2日目、2月11日(日)は、朝8時頃に旅館を出発。中津市内の福沢諭吉記念館に向かいました。ここを見学するにおいても、到着前に少し話をしました。当番が作った「しおり」は一応あるのですが、肉声で私が説明することで、より関心は高まるでしょう。石井十次の「米洗い教育」じゃないですが、何度も刺激を与えないと印象に残りません。

「昨夜、西山君の話を聞いて、みんなは彼に対して何を感じたか。色々良い話も聞けたけど、彼のその言葉の背後にあるものは何だと思う？それは誇りとプライドです。彼は友愛園で育ったことに誇りとプライドを持っている。もちろん生活習慣などの基盤とか土台が自立する時には大事だ。その基盤と土

台の上に芽生えるのが誇りとプライドだ。福沢諭吉は、その誇りとプライドのことを『独立自尊』と表現したと思う。基盤・土台がキチンとできないと、社会に出てどういう展開になるのか想像してみてもいい。身辺処理などの基本的な生活習慣ができないと、臭い汚いと馬鹿にされる。挨拶ができなかったり時間が守れないと、個人主義者だみたいに言われる。人間は、そのようにマイナスの評価をされると、プライドや誇りは持てない。逆に人間不信やうらみ・つらみだけが増大していく。事あるごとに責任転嫁し、マイナス思考に転落していく。

福沢諭吉も大変苦勞して育っている。みんなより苦勞したということは、旧居の隣にある土蔵の2階の彼の勉強部屋を見れば分かる。」

そのようなことを話しているうちに記念館に到着。子供たちはそれぞれに館内を巡っていました。残念ながら、土蔵は地震で傾いたとかで閉鎖されており、中を見ることはできませんでした。子供たちの感想です。

「分かったのは、福沢諭吉が相当の苦勞人であるという事です。1歳で父が死亡し、母子6人で貧しく生活しています。その後19歳で蘭学を学びに長崎に出ますが、すごいと思いました。そんなことができたのは、独立自尊という考えがあったからなのかと理解できました。私が『将来の夢作文』で書いた大学で学ぶというのと重なる部分があり、生き方を参考にしたいなと思いました（しずく）。」

「福沢諭吉の母親が、乞食にご飯をあげて髪の毛のシラミを取ってあげ、幼い諭吉に手伝わせるという話もありました。石井十次の母親の縄の帯の話に似ているなと思いました。思いやりがあり、心の優しい母親に育てられたので、『天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず』といった平等の考えや、『天は父なり人は同胞なれば互いに相信じ相愛すべきこと』という共生の考えが生まれたんだと思いました（まなか）。」

こうしてこの一泊旅行をまとめながら感じるのは、子供たちには、子供たちなりに多くを体験的に学び取っているということです。いずれ記憶からは消えていくかもしれない。しかし、その時得た感性や価値観は、その子供の人生を支える拠り所となっていくのではないかと感じます。

さあ最後です。大分旅行の時、帰りに宇佐神宮に寄るようになって、もうかなりの年月がたち、私も何回も訪れています。今までは、ただ有名な神社だから、子供たちの進学や自立のために参拝して帰ろう、その程度の動機だったのですが、今回は、私にとっては“お導き”を感じさせられるお参りとなりました。

この友愛通信にも書かせていただいています。高鍋の「友愛の森」事業を進める際、その地の歴史を調べている過程において、この宇佐神社にたどり着いたのです。子供たちには次のように説明しました。

「ともなやみさきが通っている高鍋農業高校（秋月藩高鍋城跡）から石井記念明倫保育園のある東側の方向をみると、鉄塔が建っているのに気付いていると思う。今、この保育園を建てかえている。

高鍋の人たちは、1600年ちょっと前頃に高鍋に入った秋月氏の歴史のことしかほとんど語らないけど、実は、それ以前1200年代から1400年代中頃まで230年間に渡って、土持氏一族が支配していた。この土持氏一族が高鍋の町の基盤・土台を作ったと言ってよい。この一族はどこから来たのか。この宇佐神宮から元々は来たようだ。宇佐神宮は700年代から800年代（奈良時代から平安時代初期）にかけて作られている。その当時全国に広がっていった荘園を管理するために、派遣された宇佐神宮の神職で、最初の頃は田部と名乗っていたようだ。

今の延岡を拠点に活動し、その後武士団として成長し、宮崎県全域を支配するようになった。

その土持一族の一派が高鍋に定着したのは1200年代初めで、「財部土持」と呼ばれるようになった。

230年間ほど高鍋を治めて、1457年に、西都の伊東一族に滅ぼされてしまう。みんなも20Kハイキングで行く西都都於郡（とのこおり）城跡はこの伊東氏の居城跡で、伊東マンショはここで生まれている。

この宇佐神宮にお参りするようになったのは、もしかしたら、土持家の御先祖様がお導きくださっていたのかもしれない。みんなもお参りする時、『高鍋（財部）から来ました』と心の中で言ってみると、何か良いことが起きるかも知れない。」

あっという間の2日間でしたが、不思議なお導きを感じる2日間でもありました。話しは変わりますが、皆様、高鍋の「友愛の森」事業の「せいごろう亭」改修への御支援、ありがとうございます。引き続き、多くの方々への支援の和づくり、よろしくお願い致します。